

2

既に在る資源と、どう付き合うか。2023年5月に開催されたG7広島サミットでの文書には「持続可能な森林経営と木材利用の促進」が初めて明記された。森林面積が国土の約7割を占める日本の貴重な資源、木材。そばにある地域材を活用する建築士やその関係者たちの実践から見えてくるものとは。

project1: OKAMEHACHIMOK コナラのテーブル

project2: y+M design office 軸組の家

神戸らしさを考え 素直に身近に在るものを探す

2023年。空き家を改装して自宅を設計していた北川さんが、ダイニングテーブルをしつらえたいと動き出したのが、このプロジェクトのはじまり。自宅の設計でも、もともと空き家にあったフローリングや土壁等をできるだけ再利用していたこともあり、新しく作るテーブルにも何か縁のあるものを大切にしたいと考えていた。

また、2023年2月に兵庫県建築士事務所協会によって開催された『神戸洋家具の過去・現在・未来 -神戸洋家具再生の道程を探る-』というシンポジウムへ参加し、神戸洋家具の存在に触れたことも大きい。神戸洋家具は、慶応3(1868)年の神戸開港に伴い居留地とその周辺に雑居地が形成され、外国人の実用的な需要が発生したことを契機に始まったとされるもの。当時、木を材料とした伝統的な和船から鉄船に移行していた時期でもあり、船大工たちの仕事が洋家具の修理業へと移行していったのだとか。美しいカーブを生み出す船大工たちの技術が、洋家具のデザインともマッチし広がっていった。時は経ち、より合理的な家具が主流となり、神戸洋家具の職人は少なくなっていった。洋家具産業は衰退し、神戸の貴重な産業のひとつとなっている。そのような話を聞き、



神戸洋家具についてのメモ(北川さんのノート)

北川さん自身が拠点をおく神戸という地域におけるプロダクトとはどのようなものだろうと考えを巡らせていくことになる。

そんな時に相談したのが、北川さんの事務所近くにある木材加工工場 MAR_U(※通称マル。旧マルナカ工作所)で木工作家として活動する池内 宏行さん(HIROYUKI IKEUCHI STUDIO)。

今の時代にあう神戸家具とはどのようなものだろうと話し合いを進めていたが、あまり”神戸らしさ”にとらわれ過ぎると頭でっかちになってしまうのでは、と素直に自分たちの身近にあるものに目を向けていくことに。身近なも

project 1:
OKAMEHACHIMOK

member:
建築士 株式会社文化工学研究所 北川 浩明
木工作家 HIROYUKI IKEUCHI STUDIO 池内 宏行
木材コーディネーター SHARE WOODS. 山崎 正夫
編集者 株式会社KUUMA 濱部 玲美

岡目八目で 木との関わりを 見つけていく

執筆:株式会社KUUMA 濱部 玲美
テーブル写真:高橋 海

今回紹介するOKAMEHACHIMOK(オカメハチモク)によるコナラのテーブルは、現在、文化工学研究所北川 浩明さんの自宅のダイニングに置かれている。6歳になる北川さんの息子は、納品されたテーブルの天板にナラ枯れによる虫食いのような穴が無数にあるのを見て、「穴くん」と呼んだのだとか。

一見、私たちの人間にとっては都合が悪いように思えるコナラのテーブルのまわりにどんな人たちが関わり、形になっていったのか。プロダクトづくりに終わらないOKAMEHACHIMOKというブランドを紹介していく。

*OKAMEHACHIMOK…物事を肩書きや専門領域で分断せず、岡目(傍ら)から眺めることで本質的な八目先(未来)を見据える取組みや技術を表現するブランドとして2024年4月にリリース。

のといっても、色々ある。六甲山の間伐材を使えないか、普段は捨ててしまう木っ端を活用できないか、などと話をしてる時にそばを通りかかったのが、MAR_Uを運営している山崎 正夫さん(SHARE WOODS.)だった。

身近にあるものに目を向けていくという意味では、神戸の木産業において山崎さんの存在はとても大きい。木質建材プラットフォーム SHARE WOODS.として、山側の都合と使い手のいる街側の都合をどう擦り合わせていくかに挑戦し、山の整備から木材コーディネート、山や木資源に関わるあらゆる相談を受けている山崎さん。北川さんが自宅を設計した際にも、新しく調達する建材はできるだけ県産材を使用したいと、山崎さんに相談していた。

コナラと一緒に流通から小さく変えていく挑戦

そんな山崎さんが提案してくれたのが、神戸の里山に多く生息するコナラであった。一般的にコナラは、家具に不向きとされている。

昔は薪として重宝されていたコナラだが、近頃その需要はほとんどない。山に放置されたコナラはどんどん大径木化していき、持ち主も山の手入れをしていた農家も高齢化しているので間伐するのが難しい(木を切るだけでなく、山から下ろすのがまた大変)。その上、大きくなるとナラ枯れ(カシノナガキクイムシがナラ菌を樹体に感染させることで樹木が枯死する伝染病)と呼ばれる虫喰いのような

コナラのテーブルに残るナラ枯れ(写真 高橋 海)



神戸市北区にある山崎さんの運営する土場(木材や土木資材の集積場)

小さな穴がポツポツと発生してくるので、材木としても嫌厭されるようになってしまうのだ。

昨今、材木屋は設計事務所や施工業者等から注文がはいれば、ほとんどが市場や問屋ですでに切られた木材を選定する。設計図ありきで材料を選ぶのだ。一方、山崎さんは、山の整備から考える。山の保全につながる整備をした際に出てくる木をどう活かすか、またその場で活かせずとも仕分けながらストックし、機会を長く待つスタイルなのだ。作り手が「こんなデザインを形にしたい」と思っても、材料がないということは往々にしてある。山は山で、目的と一致しないから使い手がないということが起こっている。山崎さんは、両方が少しでも歩み寄れる方法はないかと模索しているのだ。

神戸市北区で間伐したコナラ



コナラと同様、日本に多く生息する広葉樹は、曲っていたり節がでていたり、杉や檜のような使い勝手が良いものが多くない。広葉樹のなかでも、山崎さんがまずはコナラに着目したのは、神戸の里山に多いという理由に加えて、地産地消できる流通の仕組みを少しでもコナラから作っていけるのでは、という期待もあるようだ。

例えば、コナラの特徴がわかる使い手が増えれば、製材するサイズが読めてきたり、加工したものをストックしておくこともできるのではという考えだ。地域内で木資源を循環させていくためには、木材だけを見るのではなく、そこに関係する人たちみんなで考えていかないと動いていかないと、感じさせられた。

岡目の立場で常識を超えて関わる

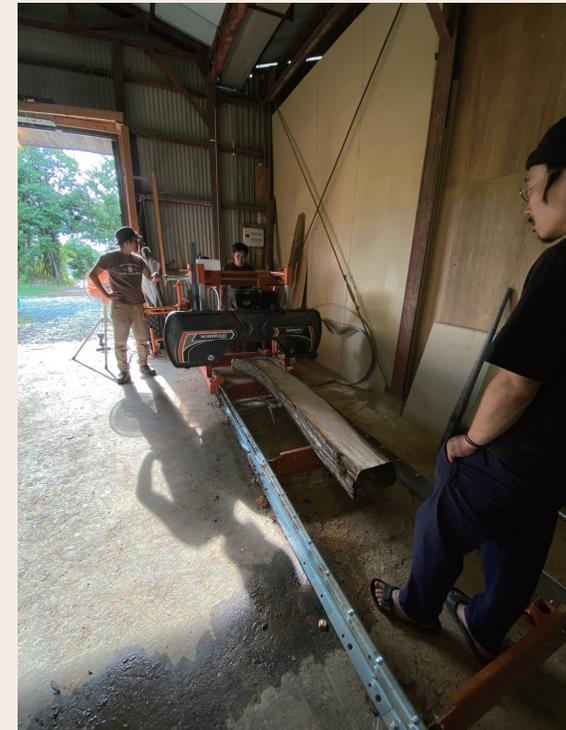
山崎さんがストックしていた数本のコナラは、樹齢30年ほどのもので、例に漏れず曲がっていて、ナラ枯れによる小さな穴もたくさんあった。けれど、それらもポジティブに捉えれば未だ見ぬものに出会えるのでは、というわくわく感も隣にあったのだとか。

製材されたものを選ぶ原木市場と異なり、丸太の状態のコナラは正直どんなものかわからない。直感を頼りになんとなかならうと、テーブルにする木材を選んでいくことになった。

コナラと向き合った池内さんは、どこまでコナラの特徴と向き合えるかを強く意識した。普段家具を作っている池内さんは、天板を綺麗に接ぎ合わせることが当たり前で、そういった要望に応じてきた一方、自然の形状を無視して隙間をなくすことは人間のエゴのように感じることもあったと言う。もう少し自然に寄り添うように作ることができないかと思っていた矢先のことだったのだ。

丸太が決まれば、次は製材だ。通常、外注して製材することがほとんどだが、たまたまこのタイミングで山崎さんが製材機を購入。外に出す方が、早く正確で簡単だが、こういったプロセスも共有できる機会も何かにつながっていくのではと面白がり、全員が製材素人のなか、挑戦してみるようになった。

実際の製材は、想像を超える難しさ。最初は、刃がたわみ一向にまっすぐ切れず、均等に厚みがでなかった。試行錯誤しているうちに機械にも慣れてきて無事製材することができたが、誤って大きな凹み生まれた。そんな凹みを「醤油受けに使えるのでは?」などと楽しむシーンもあったのだとか。



初めての挑戦した製材

人間の行動が木の形によって変わっていくことも期待させるデザイン

材料の選定と並行するように、スケッチやデザインも進めていく北川さんと池内さん。当初から、できるだけ木の形を活かした形状をと考えていた。癖のある木は使いづらいからこそ、それに合わせて自分たちがどう動くか、行動が変わっていくような関わり方が面白いのではないかと話が進んでいく。

自然が生み出すユニークなコナラの形状が、子どもたちが無邪気に描くドローイングのようだと、コナラが自分自身で空間をキャンバスにドローイングしているような景色を浮かべてスケッチや模型を制作。



とくかく手を動かして組んだ模型

一方で自然の形状に身を委ね過ぎると、陳腐になる懸念も感じて色を塗ってみることを検討したり、ランダムに組み合わせを変えてみたりと試行錯誤を重ねる。

大きな方向性は決まってきたものの、実際にどう作っていくかは未知数だったという。というのも、製材後に乾燥を終えて手元に戻ってきたコナラは、大きな割れ目があったうえに脚をとることを踏まえると、天板として使えるのはわずかという状況。それらも厚みが異なっていたり、大きな反りがあったりとやりがい十分な状況だったと、池内さん。

1800×850mmのテーブル。実際に使いやすいスケール感とコナラの癖による隙間との折り合いのバランスを見つけるために、何度も組み合わせ直したり、撮影した写真をPCで確認しどの位置を削るかどうかの検討を重ねたりした。

製材や乾燥がうまくいっていなかったのか、コナラ特有の特徴なのか定かではないが、整えた面が翌日には大きく反っていたり、直径50mmに整えた脚も翌日に2mm



乾燥後MAR_Uに
戻ってきたコナラ

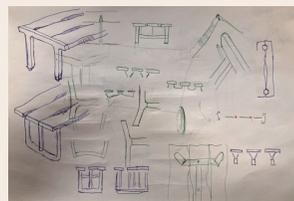


ナラ枯れの穴も影に映る(写真 高橋 海)

ほどやせ細っていたこともあったのだとか。図面を引いてみてもそれ通りにいかないことばかりで、コナラたちと一緒に手を動かしながら考えるという工程だった。

脚の付け方にも、工夫がある。通常、天板に対して四方にはいる幕板だが、3枚からなるコナラのテーブルの天板は、実は厚みが異なる。加工途中で1枚だけ大きく反ってきたため調整し29mmとなったのだ(他2枚は30mm)。また、納品後も空調等の影響により反りや縮みなどの経年変化が生まれる可能性も踏まえて、3枚のコナラからなる天板1枚ずつに幕板がついている設計になっている。

それによって、天板1枚ずつにバラして配送し現地で組み立てることになるのだが、搬入がとてもスムーズだったのだとか。1階廊下が細い北川さんの自宅に納品する際、クレーンで吊り上げ2階から搬入することを検討していたが、コナラの反りにより幕板が通常と異なる仕様にたどり着いたことで、期せずしてそんな副産物も生まれたようだ。流通コストを抑えることにもつながっている。



幕板の構造を検討する池内さんのノート

林業のない街、神戸から 遊ぶようにつくっていく

北川さんの家族の一員となった、コナラのテーブル。ずっと触っていたくなると使い心地を話す北川さん。

子どもたちは、穴に指をいれて遊ぶこともあるそう。癖の強いコナラならではの木目がダイニングのなかで存在感をもって佇んでいる。

日が暮れると照明を受けて、美しいコナラの曲線が影を作る。ゆらゆらと動いているような影は、どこかおどろおどろしく、どこかチャーミングな不思議な形。数十年とかけてコナラが生きてきた過程が、こうやって形だけでなく影としても楽しめるのも、なんだかとてもいい。



北川さんの自宅ダイニングに置かれたコナラのテーブル(写真 高橋 海)

制作工程で、北川さんの息子が工場を見学に来たことがあった。気になって仕方がないように穴を触る姿に、自分たちが失くしてしまった感覚があるのではと感じたのだとか。穴を嫌なものと決めつけてしまっていたこと、そして目の前の景色が整い過ぎていることに少し危機感を感じたと言う。岡目八目の立場だからこその子どもたちから学べるがあると改めて感じ、年齢関係なくものづくりを楽しめるようなワークショップも今後展開していければ、と話す。



見学に来た北川さんの息子

森林面積が約40%を占め、その大部分が多様性にとんだ広葉樹が息づく神戸。そんな山々に見守られた神戸には、実は林業を営んでいる人がおらず、森林組合もないため、山の資源がなかなか活用されていない現状がある。林業という木資源に関わる専門がない神戸から、山の傍にいる界限の人たちが「ああでもない、こうでもない」とコナラと遊ぶようにつくったコナラのテーブル。

傍から見ると、物事の真相がよりはっきりと見えてくるかもしれない。これからは肩書で分断せず、自分たちなりにできることから取り組んでいくのが、楽しみである。